

虚飾と拒食

——ファンシー・デイのハンガーストライキ——

山 内 政 樹

Synopsis: Fancy Day in *Under the Greenwood Tree* is often compared with Grace Melbury in *The Woodlanders*. Their respective fathers in the country, in spite of belonging to the lower class, deprive themselves of many pleasures in order to give their daughters a good education in the city. They believe that both a large dowry and an education enable their daughters to find a good marriage partner. While Grace marries the doctor, Fitzpiers, whom her father earnestly recommends as her partner, Fancy does not follow her father's wish that her father wants her to marry a person of high rank. In fact, Fancy marries Dick Dewy, who belongs to the lower class. Despite the fact that a father had an absolute authority over his daughter to decide her marriage partner in the Victorian patriarchal society, why can Fancy marry the working and poor man against her father's will? In order to get her father's permission to marry Dick, Fancy utilizes her own body as a means to negotiate with her father about her marriage problem: she goes on a hunger strike. This paper examines how her hunger strike functions and how it is described in the narrative.

序

トマス・ハーディ (Thomas Hardy) の小説, *Under the Greenwood Tree* と *The Woodlanders* はしばしば比較の対象となる。それぞれのヒロインのファンシー・デイ (Fancy Day) とグレイス・メルバリー (Grace Melbury) は共に、田舎の労働者階級の父親を持ちながら、その父親の意向により、都会で高等教育を受けた帰郷者である。しかし彼女たちが父親に与える影響は大きく異なる。グレイスは父親ジェフリー (Jeffrey) の望みどおりに、かつての許婚であった労働者階級のジャイルズ・ウインターボーン (Giles Winterborne) を捨てて、身分のある医者 of フィッツピアーズ (Fitzpiers) と結婚する。一方、ファンシーの帰郷は共同体に大きな亀裂をもた

らす。まず、村の伝統である聖歌隊に取って代わって、彼女のオルガンが教会音楽の新しい担い手となる。これまで共同体の中心であった男性が隅に追いやられ、彼女がその中心に君臨することになる。そしてグレイスとの大きな違いは、ファンシーが父親の身分ある男性と結婚させたいという意向に逆らって、労働者階級の男性と結婚したことである。もちろん、その結婚に至る過程で父親の強い反対を受けるが、彼女は自身の身体をコントロールすることでその結婚を達成する。家父長制社会において、結婚における女性の身体は、比喩的にも実際的にも、「交換」の道具として認識されてきた。つまり、娘に高い教育と持参金を持たせることで、父親以上の身分ある男性と結婚させたい、そしてその結婚を通して父親自身の身分を高めたい、そのために父親と結婚相手の男性との間で女性を交換するのである。しかし、ファンシーが家父長制社会で絶対的な権力を持つ父親のその望みに逆らって結婚できたのは、「交換」としての道具であった女性の身体を彼女自身がコントロールしたことにある。重要なのは、本文中には、ファンシーの結婚を可能にした彼女の身体コントロールに関する描写よりも、外見にばかりこだわりを見せる彼女の女性としての虚飾が繰り返し強調されていることである。本論では、その虚飾に隠された身体をどのように用いて彼女は結婚できたのであろうか、またなぜそれが可能であったのかを検討したい。

1

Under the Greenwood Tree の世界では、服装が大きな役割を果たす。まず、読者の目を引くのはファンシー自身の姿ではなく、彼女の靴である。クリスマスキャロルのために聖歌隊がルーベン・デューイ (Reuben Dewy) の家に集まった時、靴屋のペニー (Penny) がファンシーとその父親ジェフリーの靴型を取り出す。まず、靴屋はジェフリーの靴型を見せて「それは、彼が子供のときから持っていた、すごくたちの悪い親指の底豆なんだ。それに、このすごくでっかいところは、(中略)馬に踏まれたときの怪我のところさ。彼の足をぐしゃぐしゃにつぶしてしまっただけ」(24)と説明する。靴

型を見るだけでその人の人生を読み解くことができるという靴屋は、次にファンシーの靴型を取り出して、次のように雄弁に語る。

... a man in the trade can see the likeness between this boot and that last, although that is sop deformed as hardly to recall one of God's creatures, and this is one of as pretty a pair as you'd get for ten-and sixpence in Casterbridge. To you, nothing; but 'tis father's voot and daughter's voot to me as plain as houses (26)

ペニーが言うように、見る人が見れば、その靴が誰のものであるかは一目瞭然である。実際、彼は身元不明の溺死体の足を見て、その死体の身元を明らかにしたこともある。ファンシーの最初の登場は本人ではなく、彼女が身につけるものであるということからも分かるように、この小説では外観、服装が大きな役割を果たし、その人物のアイデンティティを証明するものとして認識される。同様に、ジェイムズ爺さん (**Grandfather Games**) の描写でも、その姿形よりも彼の上着に多くの描写 (23) がなされている。また、新しく赴任した牧師との面会でもデューイは改めて祖父のウィリアムズ (**Williams**) を紹介し直す。それは祖父が「日曜日にはいつも、一番の晴れ着を着込んで」(81) あるから、「チェロを持っておらんと、彼を知らないのでは、と思った」(81) からである。つまり教区内でのウィリアムズのアイデンティティはチェロによって確立されているので、チェロを持たない彼を牧師は認識できないと、デューイは判断したのである。このように、この小説世界では、身につけているものがその人物を同一化するのに大きな役割を果たしている。つまり、「この小説では、男性の登場人物は衣服によって生み出されている」(**Garson 15**) のである。

男性の場合、その服装は職業に起因するものであり、それによって共同体での彼らの位置づけやアイデンティティに安定をもたらすことができる。しかしファンシーが過剰なまでに服装にこだわるのは、周りの人から「美しく見られたい」(141) からである。彼女が身につけるモスリンの服は独身の

「働いて生活しなければならない娘には、普段着としては派手で不向き」(104)であり、キリスト教信者としてふさわしくないと恋人のディック(Dick)は指摘するが、彼女は「四十歳以下なら私に対するどんな牧師さんの意見も変えてみせる」(105)とやり返す。彼女にとっては、教会の教えよりも、人に「美しく見られる」ことのほうが重要である。同様に、ディックとファンシーと一緒にバドマスから帰ることになった時、二輪馬車が彼らを追い越した。馬車の持ち主であるシャイナー(Shiner)と運転手は追い越す時に彼女の顔に「はっきりと賞賛」(122)のまなざしを送った。そのことに腹を立てたディックは「あなたの顔には、彼らの眼に魅力的であったことがうれしいという気持ちが表れていた」(122)と彼女を非難する。たとえ、横に恋人がいたとしても、ファンシーは「ほかの男性の目に彼女がどのように見られるかについて過度に気を使う女性」(142)である。このような外観にこだわる彼女の姿を描写するエピソードは枚挙に遑がない。ジェフリーにディックとの婚約を認めてもらうために二人で会いに行く時も、同じ服を着ることに彼女は難色を示す。苛立ちを隠せないディックは彼女に詰め寄る。

“Well, then it’s all right. Because you only care how you look to me, do you dear? I only dress for you, that’s certain.”

“Yes – but you see I couldn’t appear in it again very well.”

“Any strange gentleman you mid meet in your journey might notice the set of it, I suppose. Fancy, men in love don’t think so much about how they look to other women.” It is difficult to say whether a tone of playful banter or of gentle reproach prevailed in the search.

“Well then, Dick,” she said, with good-humoured frankness – “I’ll own it. I shouldn’t like a stranger to see me dressed badly even though I am in love. ’Tis our nature, I suppose.”

“You perfect woman!”

“Yes: if you lay the stress on ‘woman,’” she murmured (134–5)

このやり取りで重要なことは、外見にばかりこだわりを見せる考え方は女性一般の性であるとファンシーが言っていることである。つまり虚飾はファンシー自身の問題ではなく、女性全般がかかえる問題であると彼女は指摘しているのである。また、ディックとの婚約が成立した後、ファンシーが初めて教会でオルガンを弾くことになったその日、彼女はこれまで以上に着飾ってディックの前に姿を現す。

If ever a woman looked a divinity Fancy Day appeared one that morning as she floated down those school steps in the form of a nebulous collection of colours inclining to blue. With an audacity unparalleled in the whole history of village-schoolmistresses at this date . . . she had actually donned a hat and feather and lowered her hitherto plainly looped-up hair, which now fell about her shoulders in a profusion of curls. (165)

ディックは友人の葬儀のために、教会には出席できないにもかかわらず、ファンシーは普段以上に着飾る。ファンシーにとって、たとえ結婚を約束した男性がいたとしても、他人に見た目をほめられることが何よりも重要である。つまり彼女が言うように、「女にはそれ（ほめられること）が、肉であり、飲み物にあたる」（165）。ここでも同様にファンシーは虚飾が女性一般の性質であることを強調している。ファンシーとディックの結婚式後に、ジェームズ爺さんが「彼女が気にしているのはディックかね、それとも彼女のウェディングドレスかね」（191）という問いかけに、ウィリアムズが予言者エレミア（Jeremiah）の言葉を借りて、「乙女は、その飾り物を忘れることができようか。花嫁は、その帯を忘れることができようか」（191）と答えている。ファンシーの他人に「美しく見られ」たいという願望は、女性一

般が持っている当たり前願望であるから、彼女の虚飾は取るに足りないものであるという狙いがここでは見て取れる。しかし女性一般の行動と大きく異なる行動をファンシーはとることになる。その行動は家父長制社会を脅かすものであり、家長である父親の意向をも覆すものである。つまり、繰り返し強調される彼女の虚飾に隠された彼女の身体コントロールである。

2

ファンシーがハーディ小説のほかのヒロインと決定的に異なるのは、父親が存在しているにもかかわらず、その監督下にいないことである。そのため、彼女は結婚相手を自由に選択でき、親の反対に対する対抗手段を持つことができる。彼女の特異な状況を示すために、まず *The Woodlanders* のグレイスの置かれた状況を見ておこう。グレイスとジャイルズの結婚を決定的に破壊したのは、都会での教育によって身につけた彼女の洗練さが、田舎者のジャイルズを卑小な存在にしてしまったこともあるが、一番大きな要因は、娘を身分ある男性と結婚させたいという父親の思惑である。メルバリーはかつてジャイルズの父親の結婚相手を奪い取ってしまった罪の意識から、自分の娘をジャイルズと結婚させることによって、その罪を償う誓いをたてていた。しかし、都会生活で洗練された立派な娘の姿を見て、「娘にあれほど高い教育をしてやり、長い間、しかもこの辺の娘より並外れて教育したもののだから、あの程度の男（ジャイルズ）に嫁にやるのは、娘を無駄遣いするようなものだ」（W 18）と考える。その考えはフィッツピアーズの登場でさらに強くなる。良縁を望むメルバリーは自分の「馬や荷馬車、とうもろこし」（W 89）より、娘を「良材」（W 154）であると言い、大金を「投資」（W 89）するだけの価値があり、ジャイルズと結婚するより「もっといい結果が生まれる」（W 89）と考え、身分あるフィッツピアーズと結婚させようと画策する。グレイスが「単なる動産」（W 89）として自分を扱わないでほしいと父親に言っても、彼はその単語の意味すら分からず、取り合ってくれない。メルバリーはジャイルズとの交際をやめるよう娘に言い、フィ

ツツピアーズと結婚するように話を進めていく。グレイスのジャイルズとの別れ、それに続くフィッツピアーズとの結婚に至るまでの過程はすべて父親の監督下で行われる。はじめ、メルバリーはジャイルズとの間で自身の過去の過ちと自分の娘を交換することで償いをしようと考えた。しかし、娘の洗練された姿を見て、今度はフィッツピアーズとの間で娘を交換することで良家の血を手に入れようとする。経済的に父親に依存する立場ゆえに自己決定権を行使できないこと、自分の苦痛を口にできないことがグレイスの、あるいは当時の女性の悲劇である。家庭という限られた領域に閉じ込められ、結婚という社会的役割を与えられた女性は結婚を通して男性同士の間で交換される。経済的に自立していないグレイスは女性の身体をまさに「動産」として扱う文化の押し付けに逆らうことができず、父親の要求への服従と自己犠牲的な女らしい行動に自分自身を一致させようとする内的義務感のため、フィッツピアーズと結婚する。

しかし、ファンシーは同じような状況にありながら、異なる結果を生み出す。ルーベンも同様に、共同体のどの娘よりも高い教育を娘に与えた。そして十分な財力があるにもかかわらず、娘の持参金を増やすために自分自身も節制して、娘にも教師として働かせている。その理由をメルバリーは、ディックがファンシーとの結婚を申し込みに来た時に次のように話す。

“Well – and do ye know what I live in such a miserly way for when I’ve got enough to do without it, and why I make her work as a schoolmistress instead of living here?”

“No.”

“That if any gentleman who sees her to be his equal in polish, should want to marry her, and she want to marry him, he shan’t be superior to her in pocket. Now do ye think after this that you be good enough for her?” (153–4)

メルバリーもルーベンも父親として娘をより身分の高い紳士と結婚させるこ

とを望み、そのための「投資」として娘に高い教育を授けている。しかしルーベンの最大の失敗は娘を監督下に置かず、経済的に自立可能な教師として働かせたことである。そして、親子が離れて暮らすということは、父親が娘の食事や体調管理をできないということである。父親の「断固とした反対」(156)により、ディックとの結婚が不可能となったファンシーは、魔女との噂のあるエリザベス・エンドウフィールド (**Elizabeth Endorfield**) に助けを求めに行く。この魔女の助言により、ファンシーは父親の反対を覆すのであるが、その方法とは拒食である。

3

拒食症の認識は古くから存在し、一六八九年に、ロンドンの医師リチャード・モートン (**Richard Morton**) が神経性と思われる食欲不振に陥った患者の症例論文を発表している。しかし *Under the Greenwood Tree* で扱われている拒食は医学的な病の問題ではなく、いわゆる恋の病である。ファンシーは意識的に拒食を実行に移している。父親の反対でディックとの結婚が不可能になったファンシーは、魔女の助言通りに、その結婚については一言も触れず、父親に対して無言の抗議をしかける。彼女は父親とディックの会見後、食事を制限するようになる。

During the meal he watched her narrowly. And to his great consternation, discovered the following unprecedented change in the healthy girl. That she cut herself only a diaphanous slice of bread-and-butter, and laying it on her plate, passed the meal-time in breaking it into pieces, but eating no more than about one-tenth of the slice. Geoffrey hoped she would say something about Dick and finish up by weeping, as she had done after the decision against him a few days subsequent to the interview in the garden. (159)

娘との会食後、ジェフリーは下男のイーノック（**Enoch**）からファンシーのうわさを耳にする。イーノックは、ファンシーが学校の仕事が続けられないほど食事の量を抑えていると告げる。また、ジェフリーは娘から予定していた二匹の子ウサギの肉を届けてもらわなくてもよいとの手紙を受け取る。そして肉屋に勘定を払いにいったジェフリーは、娘の分の支払額が少額過ぎることに愕然とする。「肉屋の勘定の少額なことが、支払い者の苦悩の原因になったということは、商取引の歴史でもたぶん最初であっただろう」（160）。ファンシーは食べることを拒否する。彼女の日々痩せ衰えていく姿は父親の心配の種となる。拒食中のファンシーの姿は痛々しい。「どんな理由であれ、天気の良い午後にベッドに寝ている人に会うことはかなり憂鬱なことだ。ベッドで青ざめているファンシーが彼の唯一の子供であればなお一層である」（161）。ファンシーは拒食中の痛々しい身体を通して自分の内面にある感情を包み込むのではなく、それを父親に投影し、そして手渡す。一方感情を投影されたジェフリーは衝撃を受けて、しり込みする。重要なことは、彼女の拒食に関する描写はすべて父親ジェフリーの視点を通して描かれる点である。彼女の痛々しい姿は、彼女自身の問題ではなく、父親の問題に置き換えられているのである。だから彼女に対する同情は彼女を失うかもしれないという恐れに変わる。彼女の物言わぬやせ衰えた姿をテキストとして、父親は彼女が拒食をする意図を読み解かなければならない。彼女の拒食をやめさせる方法は一つしかない。それは娘の無言の抗議を受け入れることである。

ファンシーのこの行動はハンガーストライキである。彼女は「絶望や無力感を感じている者が、力あるものと戦う際の最後の武器である」（ヴァンダーエイクン 106）拒食によって、家長である父親の権威と戦った。彼女は自身の痛々しい姿を通して、女性の身体が所有者である一個の女性に属するのではなく、抗争の手段であることを示したのである。そして、結婚をする際、家父長制社会により規定される女性の役割を拒絶して、彼女は拒食を武器に、激しい抗議の声を上げたのである。つまり、彼女の拒食は自分の主張が損なわれ、否認されている人の行動である。拒食は女性の身体のみが重要

視される時代に「精神的機能の飢餓状態に注意を引く手段として、身体的飢餓を誇示」(Showalter 128)する行動である。さらに、彼女の拒食は単なる一時のむら気などではなく、絶望し、もし食事をとれば、自分の動機があやふやなものになるという信念のもとに、劇的で外見的に自罰的な唯一の抗議形態であることを示している。彼女の日々やせ衰えていく姿には「緊急性と重み」(Orbach 142)がある。実際、ジェフリーはベッドに横たわる娘を見て、彼女を失うかもしれないという恐怖が大きくなり、仕方なく彼女の結婚を承諾している。

ファンシーにとって重要なことは、「拒食は、身体を自分のコントロール下におく手段である」(ヴァンダーエイケン 216)ということである。結婚における女性の身体の交換システムに対抗する窮余の策として、彼女は命の危険のある拒食を選んだのである。所有するものとしての身体と、正反対に女性の身体を「もの」として扱う文化との抗争の場が、彼女の弱りきった身体であり、最終的に彼女は自分自身の身体を取り戻したのである。

しかし、ファンシーの拒食は当時の女性の考え方と大きく異なる。ヴィクトリア朝時代を生きる女性にとって、体型は大きな関心ごとの一つである。豊かな胸と細いウエストが理想とされた時代、十九世紀の女性は、女性らしいたしなみとして食欲を抑え、細い身体を奨励する文化の中で生きていた。教養ある女性の多くは、少しでも理想の体型に近づくために、コルセットを着用し、さらに女らしいたしなみとして食欲を抑えることを奨励するマナーブックを読んで育った。女性が細い身体を作るために空腹を我慢した最大の理由は、条件の良い男性と結婚するためであった(武井 148-150)。そのため人前で食事をすることを極端に押さえ込んだ。食欲は女性が禁じられた欲望の一つであった。このような時代背景と比べてみると、ファンシーの拒食がいかに異質なものであるか、彼女の目的が当時の女性と正反対の方向に向かっていることがよりはっきりする。彼女は父親が強く薦めるより良い結婚相手であった教区委員のシャイナー(Shiner)を拒絶し、メイボルド(Maybold)牧師の求婚も断っている。彼女が空腹を我慢する最大の理由は、条件の良い結婚相手を選ぶためではなく、彼女の父親より財産のない、単なる労

働者階級のディックのためである。

また、ファンシーの拒食は、そのきっかけがエンドウフィールドによるものであることは大きな意味を持つ。エンドウフィールドの共同体における地位は、教会にも出席しない、家の中でも決してボンネットを手離さない、あごのとがった怪しい魔女である。ファンシーのこの拒食という対抗手段は、この魔女の助言によるものであり、ファンシーの拒食の異質さをさらに際立たせる。本来、娘が絶対的存在である父親の意見に逆らってまで結婚することはありえない社会において、彼女の拒食はまさに、社会から逸脱した「魔術」(159)によるものであり、自由恋愛を求めるファンシーの唯一の対抗手段である。

ま と め

ファンシーの拒食は、男性主導によるいわゆる政略結婚を根底から覆す恐れのある行動である。ファンシーは、政略結婚ではなく、彼女が求める自由恋愛による結婚を達成するために、家父長制社会が女性の結婚に求める障害(父親が決める結婚相手)を一人で乗り越えなければならなかった。そのために彼女は拒食という手段を用いて命がけで戦い、そして勝利したのである。しかし彼女の勝利はこれまで家父長制の根幹である父親の絶対的な権力を脅かすものであるため、ハーディはファンシー(あるいは、女性全般)の拒食による抵抗を肯定的に読者に示すわけにはいかない。なぜなら当時の検閲システムがそれを許さないと考えられるからである。それゆえ、望みどおりの結婚相手を得る手段として、ファンシーに拒食を提示したのは社会のアウトサイダーである魔女でなければならない。また、ファンシーが結婚相手を手にしたのは正規のルート(父親の押し付け)ではなく、魔術による特別な方法で手に入れたことを示さなければならない。

拒食によってやせ衰えたファンシーのショッキングな身体的印象を読者に鮮明に残さないために、彼女の苦しむ姿は極端に抑えられている。上述したように、ファンシーの拒食はすべて父親の視点を通して語られ、語られる内

容は食事の量が減ったことだけである。これとは対照的にファンシーの虚飾は、テキスト中に何度も繰り返し詳細に語られる。ファンシー（女性）が着飾るのは、男性の気を引くため、他人に良く思われたいためであるが、その衣服が覆い隠す彼女（女性）の身体は決して父親（男性）が自由にできないことをこの小説は示している。女性が女性の身体を取り戻すその手段として拒食が選ばれ、その拒食という手段があまりにも当時の読者に衝撃を与えるものであるため、それを隠す手段として虚飾が選ばれたのである。テキスト中、虚飾は女性の性であるという印象を何度も読者に植え付けることで、ハーディはファンシーが虚飾にしか興味のない女性であるという印象を植え付けることに成功した。結婚相手を選ぶために拒食という命がけの選択をするほどの意志の強い女性であることを隠すために。

Works Cited

- Garson, Marjorie. *Hardy's Fables of Integrity: Women, Body, Text*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
- Hardy, Thomas. *Under the Greenwood Tree*. Ed. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1999.
- . *The Woodlanders*. Ed. Dale Kramer. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Orbach, Susie. *Hunger Strike: The Anorectic's Struggle as a Metaphor for Our Age*. London: Penguin Books, 1993.
- Showalter, Elaine. *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830–1980*. New York: Virago Press, 1987.
- Vandereycken, Walter and Ron van Deth. *Van vastenwouder tot magerzucht: annotatie*. Amsterdam: Boom, 1988 『拒食の文化史』野上芳美, 青土社, 1997年。
- 武井暁子「食べてはいけない, 食べない, 食べられない——ジェイン・オースティンの拒食症患者を診断する」横山茂雄編『危ない食卓——十九世紀イギリス文学にみる食と毒』新人物往来社, 2008年。136–168頁。